

## 学 位 論 文 要 旨

氏 名

セーパーラ ムディヤンセーラーゲ チンタカ バンダーラ カラッリヤッタ

題 目

土地劣化の人的側面に関する研究—スリランカドライゾーンにおけるカスケードタンク灌漑システム後背畑地の事例—(A Study on the Human Dimension of Land Degradation: The Case of Rain-fed Uplands of the Cascaded Tank-Village System in the Dry Zone of Sri Lanka)

スリランカ低地乾燥地帯のカスケードタンク灌漑システム (CTVS) の構成要素である後背天水畑地の土地劣化は、学際的アプローチによる解決を要する深刻な環境問題である。しかし、従来の研究は、その生物物理学的な側面に偏重し、人間の意思決定過程や行動は直観的に理解してきた側面がある。そこで本論文は、この問題の人的側面に着目し、過去や現在の農民、その他の利害関係者の土地劣化に関わる意思決定過程と行動に焦点をあてた4つの研究を行った。調査対象地は、CTVSの典型事例の一つRanpathwilaである。

第1の分析は、以前の利用形態であった焼畑移動耕作とそこに内在する土地保全の知見に焦点を当て、当時の農民の経験的な生態学的知識が焼畑移動耕作の持続可能性を保証していたことを示した。しかし、今日、そうした移動耕作は土地利用形態の規制が強まる中で次第に常畑化し、その土地利用をめぐる政府や民間を含む多くの利害関係者がかかわるものに変容した。

つぎに、現在の土地劣化に関する農民の認識を調査し、農民は土地劣化の科学的指標である土壌浸食、土壌肥沃度の低下及び森林破壊を経験的に十分認識していることが明らかになった。また、農民は土地劣化の自然的及び人為的原因とその発生過程の相互関係も理解し、土地劣化に対する道義的責任を感じていた。ただし、政府が土地劣化対策に関する権能を有するため、農民自身は部分的に責務を負うに過ぎないと考えていることも明らかになった。

第3の分析は、Norm Activation Model と Theory of Planned Behavior の統合アプローチによって農民の土壌保全行動の原因メカニズムを解明した。その結果、農民の土壌保全に関する意思決定が直接間接の決定要因からなる複雑な過程であること、中でも個人の規範意識と自覚的な行動制御が重要な予測因子であり、土壌保全に対する道義的義務感、問題解決への自信や能力面での自己肯定感、物的資源の賦存状況が、土壌保全行動の蓋然性を高めることが明らかになった。

最後に、土地劣化対策にかかわるさまざまな立場の利害関係者が、農民および持続的土地利用にむけた方策についてどのような捉えているかを検討した。その結果、それぞれの専門知識や立場とは無関係に、農民の土地劣化に対する認識向上、農民の適用可能な保全方法の導入、自然環境調和型の耕作への農民の誘導、法や制度による農民行動の規制、の必要を主張する4つの主観的認識に分類されることが明らかになった。

以上4つの研究から示唆されることは、土地利用者である農民が土地劣化の原因やそのメカニズムの認識と当事者としての責任や解決の義務を負うことを自覚し、その解決に向けて一定の貢献意欲を持っている一方、それを支援する側の利害関係者は依然として無知や無自覚といったステレオタイプの農民像に固執している実態である。今後、CTVSにおける後背畑地の土地劣化対策を効果的に推進していくには、農民と利害関係者の、エビデンスに基づいた相互理解を深めることが肝要である。